

# 日本歯科大学第4学年合同ワークショップにおける協同学習

長田敬五・藤井一維・佐藤利英  
(日本歯科大学新潟生命歯学部)

キーワード：協同学習、ジグソー、グループ、ワークショップ

## 【はじめに】

日本歯科大学は、東京都千代田区にある生命歯学部と新潟県新潟市にある新潟生命歯学部の2つの歯学部を有している。平成24年度より毎年1回、一般目標「日本の歯科医療に大きく貢献する歯科医師となるために、全国29校の歯科大学・歯学部を先導する日本歯科大学特有のプロフェッショナルリズムを身につけ、卒業までの3年間にできることを考える」とテーマ「両学部の特色を活かした連携」の下、両学部の4年生を一堂に集め、富士見・浜浦フェスタという1泊2日の合同ワークショップ(WS)を実施している。

本WSでは、これまで両学部の再認識と連携を目的としたスモールグループディスカッションとグループ毎の発表およびCBT(Computer Based Testing: 共用試験制度の1つ)を見据えた歯科医学に関する学習セッション(個人別解答を含むグループ学習)が実施されてきた。今年度は有益な学習(方法)の修得を実践するため、学習セッションに協同学習を導入した。今回は、その実践内容と結果について報告する。

## 【方法】

対象：生命歯学部(東京)と新潟生命歯学部(新潟)の第4学年学生、全204名。

グループ構成：全20グループ、10名または11名/グループ。グループメンバーは東京と新潟の混成を原則とし、学生の出身がなるべく同地方となるように編成した。各グループにはタスクフォースとして1名の教員が就いた。約半数のグループでは、協同学習の講演と研修を受講・修了した教員(新潟)がタスクフォースを担当した。

学習方法の変更点：従来の学習セッションでは、先ず問題(15問)に対する正・誤答の解説をグループディスカッションによって作成した。次に、新たな20問(前問と同領域の問題)を個人で解答し(答案は回収)、その後、グループディスカッションによって同問題に対するグループの解答を提出してきた。

今回は、次のような手順で実施した。

- 1) 本WSを実施する前に、学生にグループメンバーと各自が担当するコアカリ領域を到達した。
- 2) WS当日、問題(20問)を配付し、各問題に対する正・誤答の解説を個人で作成する。
- 3) ジグソーの実施。3-① 学生は担当コアカリ領域毎に集まり

(専門家グループ)、解説の確認・検討のディスカッションを行う。3-② 専門家グループで得た情報を元のグループに持ち帰り、内容を説明する。3-③ 元のグループでディスカッションをして、全ての問題の解説を完成させる。4) 従来どおり、別の20問に関する個人解答とグループ解答を提出し、WSの最後に、最優秀賞(個人)と正答率の伸び率が最も大きいグループを表彰した。

アンケート調査：学習セッションの前後に「協同作業認識尺度」(5件法、3因子：長濱等、2009)を用いたプレ・ポストアンケート調査を実施した。グループディスカッションを通して列挙された、本WSに関する学生の気付きについて検討を行った。

## 【結果と考察】

協同学習の前後(プレ、ポスト)で行った協同作業認識尺度調査の結果、協同効用因子の平均得点は4.05 → 4.16、個人志向因子の平均得点は2.89 → 2.69といずれも有意な差が見られ、協同学習による効果を示唆した。1回の協同学習でも協同効用因子と個人志向因子の向上が可能であり、学習者の意識を協同的な方向に導くことができるように思われる。学生の気付きを分析したところ、殆ど全てのグループで協同の重要性や効率性および勉強に対する前向きな意識への変化を挙げ、学生は協同学習に対して肯定的であることが判明した。本WSにおける協同学習をさらに充実させるためには、少なくともタスクフォースを担当する全ての教員の協同学習(教育)への理解が不可欠だと考える。

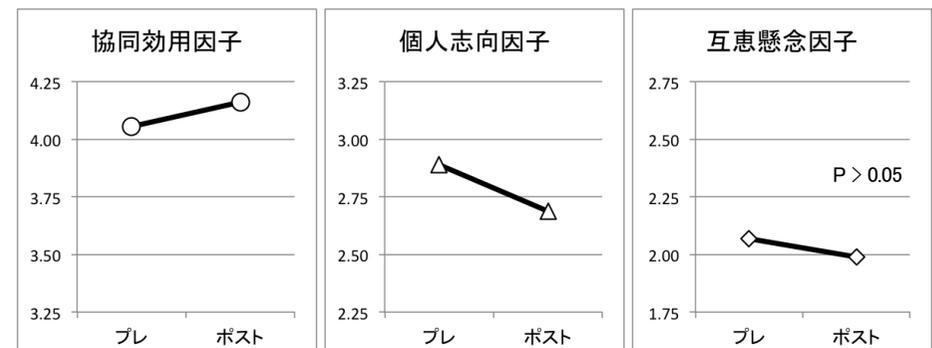


図1. 協同学習前後における各因子の平均得点変化

## 【引用文献】

長濱文与・安永 悟・関田一彦・甲原定房(2009). 協同作業認識尺度の開発. 教育心理学研究, 57: 24-37.